

アメリカ議会図書館所蔵『南洋庁東部支庁関係書類』について
-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その12-

正会員○辻原万規彦*1 同 今村仁美*2 同 安浪夕佳*3

9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史 建築歴史・意匠

南洋群島, トラック諸島, 官舎, 南洋拓殖, 社宅,

1. はじめに

一連の本研究は、戦前期の南方諸地域を対象として、1) そこで行われた日本人による建築活動の実態、2) 当時用いられた室内環境調整手法の実態、3) 戦前期日本の「南方進出」の技術的側面、特に建築活動の側面、を明らかにすることを目的としている¹⁾。その中でも、まず戦前期の約30年間に亘って日本の統治下にあった旧南洋群島における建築活動に焦点を充てて研究を進めてきた。しかし、この地域は第二次世界大戦中の激戦地となったところが多いため、同時代の史料が少なく、当時の建築物の図面については、アジア会館アジア・太平洋資料室所蔵の一連の図面²⁾の他には、ほとんど発見できていなかった。このほど、アメリカ議会図書館で、当時の図面類³⁾を確認することができたので、本稿で報告する。

なお本稿では、当時の用語や呼称をそのまま用いた。また以下では、原則として引用文などは、現代仮名遣いに改めた。

2. 資料の概要

「アメリカ議会図書館アジア部門日本語蔵書」(Japanese Collections, Asian Division, Library of Congress)に含まれる『南洋庁東部支庁関係書類』(ラベル番号:MLCMJ2000/00810)と題する資料綴りの中に、南洋群島トラック諸島における建築物に関する一連の図面が収められていることが確認できた⁴⁾。

この資料綴りの目次は、以下の通りである。

- 第一 行政庁及市民建造物
- 第二 民間側小舟艇調
- 第三 給水ニ就テ
- 第四 民間側可能舟艇数

「第一 行政庁及市民建造物」のみには、さらに陸軍の用箋を用いて「N. 一般施設 行政庁及市民建造物 南洋庁東部支庁」と書かれた仕切りがあり、これ

以降に、地図1枚を含む26枚の資料が綴り込まれている(表1)。これらの資料群は、内容からさらに3種類に分けることができる。①トラック諸島夏島における建築物の図面類、②「南洋拓殖株式会社夏島事業所 社有舎宅設計図」一式、③その他の建築物の図面類、である。いずれの図面も、アジア会館アジア・太平洋資料室所蔵の図面類²⁾(以下、「資料室図面類」と称する。)ほど詳細に描かれたものではないが、官舎や社有舎宅(社宅)のみならず南洋群島における建築物の全容を知る上でも非常に貴重な資料であると考えられる。

なお、この資料綴りは、以下の理由から、終戦直後に、現状を把握するために作成されたと推定される。

- ①「南洋庁東部支庁」名義で書かれた「民間側小舟艇調」では、「1945.8.15 現在」と「1945.12.13 現在」の舟艇数が記載されていること。
- ②「脇石鯨工場」の図面中の位置図には、「コブラ倉庫跡」や「製油工場跡」の文字が見え、空襲で倉庫や工場が焼失した戦後に調査されて作成された図面と考えられること。

表1 『南洋庁東部支庁関係書類』に含まれる図面一覧

資料の名称	同一資料に含まれる図面
4 夏島建築物配座図(地図)	
5 東部支庁官舎3, 4, 5号	注)4頁~25頁:「トラック諸島夏島における建築物の図面類」
7 東部支庁官舎6, 7号	27頁~41頁:「南洋拓殖株式会社夏島事業所 社有舎宅設計図」
9 東部支庁官舎8号	
11 東部支庁官舎9号	43頁~53頁:「その他の建築物の図面類」
13 東部支庁官舎10号	
15 東部支庁官舎1, 2, 11, 12, 13, 14号	
17 東部支庁官舎15号	
19 東部支庁遊楽派出所	
21 夏島公学校	
23 株式会社台湾銀行トラック出張所	
25 南洋興発株式会社トラック営業所	
27 表紙	
29 社有舎宅一覧表	
31 夏島農場配座図/春島第一農場配座図	
33 夏島農場建物平面図	職員家族待合室 事務所 社員宅 職員庫
35 夏島農場建物平面図	酒保倉庫 社員宿舎 支那人宿舎 農夫宿舎
37 春島第一農場建物平面図	事務所 職員宿舎 職員宿舎 倉庫 農夫宿舎
39 春島第二農場建物平面図	(配座図) 事務所 職員宿舎
41 水曜島農場平面図	(配座図) 職員宿舎 職員宿舎
43 家屋所在地地図(広戸許旨)	
44 家屋平面図(広戸許旨)	夏29 夏30 夏31 夏32
45 脇石鯨工場	(平面図) 位置図
47 脇製油工場	平面図
49 月島公学校	(平面図)
51 月曜島公学校官舎	(平面図) 位置図
53 東部支庁官舎 水曜島遊楽派出所	(平面図) 位置図

"Nan'yoch'o Tobu Shich'o kankei shorui (Documents of South Seas Bureau East Branch)" owned by the Library of Congress
- Studies on the building activities of Japanese architects and their control of indoor environment in Oceania and Southeast Asia under the Japanese administration Part 12 -
TSUJIHARA Makihiko, IMAMURA Satomi and YASUNAMI Yuka

3. トラック諸島夏島における建築物の図面類

「トラック諸島夏島における建築物の図面類」には、地図1枚、図面など11枚が含まれている(表1)。

南洋庁東部支庁は、第二次世界大戦中の行政簡素化に伴い、昭和18(1943)年11月に、従来のトラック、ポナペ、ヤルートの各支庁を統合して設置された⁵⁾。東部支庁舎は、従前のトラック支庁舎と同じく、トラック諸島夏島に置かれた。夏島には、第一次世界大戦中に、ドイツ領であったマイクロネシアを占領した後、臨時海軍防備隊司令部が置かれた⁶⁾。また、第二次世界大戦中には、連合艦隊司令部や第四艦隊司令部が置かれるなど、海軍の根拠地であった。

「東部支庁官舎3, 4, 5号」(図1)の構造は「外部無筋コンクリート 内部木造平屋建」と記されている。無筋とはいえ、この時期の官舎でコンクリート造であったのは、珍しい例と考えられる⁷⁾。

「東部支庁官舎6, 7号」(図1)は、二戸建官舎であり、一戸分の建坪は、「資料室図面類」に含まれる(以下、単に「資料室図面類」などと記す。)丙号官舎よりもさらに小さく、これまでに図面が確認できている官舎の中では最も規模の小さい官舎である。

「東部支庁官舎8号」は、大きな一部屋のみであり、集会所などであった可能性が高い。「東部支庁官舎9号」(図1)は、建坪数が同程度の乙一号官舎(「資料室図面類」)の居室配置とは大きく異なる。風呂や台所もなく、標準型の官舎ではない可能性、すなわち借り上げ官舎などである可能性も高い。「東部支庁官舎10号」(図1)は、建坪17.6坪にもかかわらず応接室を持つ。官舎に関する既往研究⁸⁾では、応接室を持つ官舎はより大規模な官舎であった。これについても民間の住宅を借り上げた可能性が高いと考えられる。

「東部支庁官舎1, 2, 11, 12, 13, 14号」(図1)は、丙号官舎(「資料室図面類」)を線対称とした居室配置とほぼ同じである。「建築物ノ時間的直射日光投入図」(「資料室図面類」)でも用いられていたことを考えると、南洋群島内では、この丙号官舎に類する官舎が数多く建てられていた可能性が高いと考えられる。

「東部支庁官舎15号」(図1)は、これまでに図面が確認できている他の官舎とは異なり、全ての部屋に廊下などから直接アクセスできる居室配置にはなっていない。借り上げ官舎か、日本が統治を始めた比較的

初期の頃に建てられた可能性も考えられる。

「東部支庁巡查派出所」は、戦争末期に臨時に設けられたものと考えられる。南洋群島の場合、支庁が置かれている市街地では、支庁舎内に警務係が置かれて派出所が設けられないこと、事実上の標準型である乙号巡查駐在所(「資料室図面類」)(21.75坪)に比べても建坪数が非常に小さい(8.82坪)こと、による。

4. 南洋拓殖株式会社夏島事業所 社有舎宅設計図

「南洋拓殖株式会社夏島事業所 社有舎宅設計図」一式には、表紙1枚、一覧表1枚、図面など6枚が含まれている(表1)。

これまでに南洋拓殖株式会社(以下、「南拓」と称する。)に関連する建築物に関するまとまった図面はほとんど発見できておらず⁹⁾、これらの図面一式は、トラック諸島において南拓が展開した事業の詳細を知る上でも重要な資料である。

南拓は、南洋群島と外南洋の一部を主な対象として、「燐鉱採掘事業、水産業、海運業その他各種事業の経営に当ると共に資金供給の方法に依り拓殖事業の発展に寄与する」ために、昭和11(1936)年に設立された国策会社である¹⁰⁾。本店をパラオ・コロールに、支店を東京におき、南洋群島内と外南洋にあわせて10個所以上の事業所や出張所を設置し、20社以上の関係会社を設立した。しかし、終戦に伴い、閉鎖機関に指定され、昭和25(1950)年に解体された。

南拓トラック事業所は、海軍への野菜供給を主な目的として、昭和16(1941)年に開設され、同時に夏島農場を開いた。さらに、昭和17(1942)年春島に第一農場と第二農場が開かれた。また、昭和18(1943)年8月には、軍の増産要請によって水曜島と火曜島に農場の開設協力を行った。

農場の「舎宅」(社宅)などであるので、市街地に建てられた社宅と比較するのは問題があるが、炊事場や便所などを持たない舎宅も多い(図1)。簡易な図面であるため省略された可能性もあるが、いずれにしても良好な環境であるとは言い難いと言えよう。その中でも、職階に応じて差別化が図られていた(図1)のは、内地はじめ他の官舎や社宅の場合と同様である。

5. その他の建築物の図面類

「その他の建築物の図面類」には、図面など7枚が含まれている(表1)。

「第一 行政庁及市民建造物」の中に、個人の住宅や比較的小規模な工場の図面が含まれている理由は定かではない。この中に挙げられている建築物以外にも戦後になってから残存していた建築物が確認されている¹¹⁾ので、空襲によって焼失せず残存した建築物の全てを調査し、記録したとも考えられない。

月曜島公学校は昭和5（1930）年4月に開設され、同年11月に新しい校舎が竣工した¹²⁾。官舎（図1）についても、校舎の竣工と同時に竣工したと考えられる。この官舎の図面は、「東部支庁官舎3. 4. 5号」の図面と全く同じものである。

「木曜島巡査派出所」（図1）の設置時期について

は、現在のところ不明であるが、少なくとも昭和11（1936）年版の『南洋群島警察概要』（南洋庁編、南洋庁、1936.11）には掲載されていないため、それ以降に設置されたと考えられる。南洋庁の巡査駐在所の事実上の標準であった乙号型（「資料室図面類」）よりも部屋数は多いものの、建坪数は少ない。また、居室配置も異なっており、標準設計には従っていないと考えられる。トラック諸島の中でも人口が少なく、離島とも言える木曜島に建設されたので、標準設計よりも規模を縮小した可能性、もしくは比較的遅い時期に建設された場合は資材の確保が難しかった可能性が考えられる。

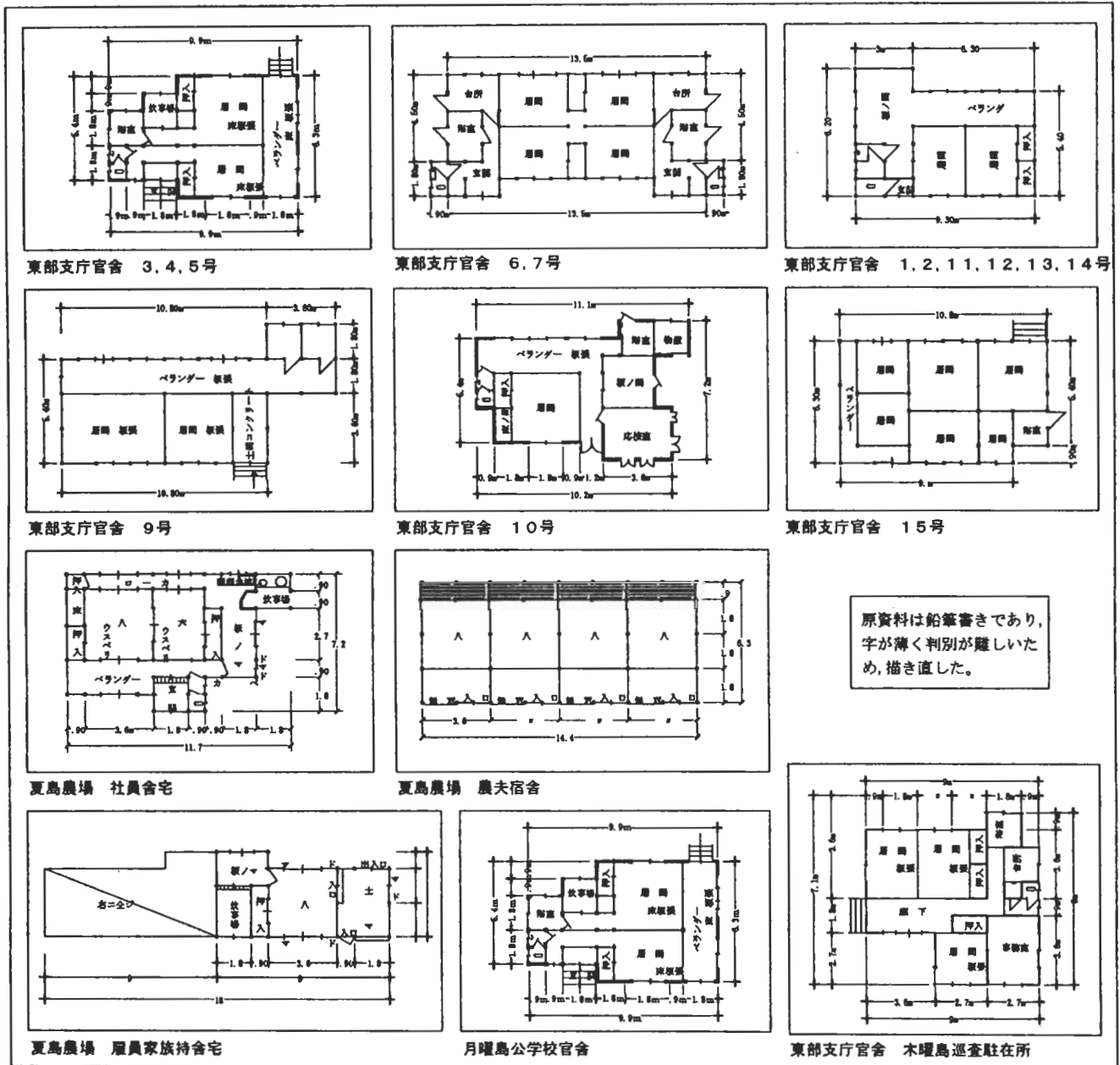


図1 『南洋庁東部支庁関係書類』に含まれる官舎と社宅の図面（一部）

6. 南洋群島における社宅と官舎の特質

南洋群島における社宅の特質としては、「資料室図面類」に含まれている南洋興発の社宅²⁾や4. で述べた南拓の社宅では、現業員向けの社宅にさえ「ベランダ」が設けられていたことが挙げられる。樺太・富士製糸・知取工場の社宅では、「ベランダ」が確認でき、洋風生活の導入とも考えられるが、建設戸数から判断して一般的ではなかったと判断される。¹³⁾と述べられているが、南洋群島では、「ベランダ」の設置は非常に一般的なことであったと考えられる。これは、官舎の場合も同様だが、南洋の熱帯性の気候が関連しており、直射日光を避け、風通しが良い空間を確保したいためであったと考えられる。そのため、戦前期の社宅に関する既往研究に見られる他の社宅と同程度の建坪を持つ社宅であっても、南洋興発や南拓の社宅の場合では、概ね一部屋ずつ少なくなっていた。

また、南洋群島の官舎独特の使い方として、空いている官舎もしくは留守にしている官舎を他の官吏が一時的に利用していたことが挙げられる。野口正章の同時代の小説「外地」では、主人公がパラオに到着した当初は、住人が長期出張のために留守にしている官舎に住んだことになっている¹⁴⁾。また、南洋庁の国語教科書編集書記として南洋群島に赴任した中島敦が家族に送った書簡の中でも、群島内での出張中に度々空いていた官舎を利用した旨の記述がある¹⁵⁾。群島内にはパラオの南洋ホテルのほか、各地に旅館があったことが各種の写真集で確認できている。しかし、いずれも小規模な旅館であり、部屋数も限られていたために、旅行者は群島各地の官舎や倶楽部（南洋庁の昌南倶楽部や南洋興発の倶楽部などのように、官吏や社員の慰安のための集会所のような施設）などを利用していたと考えられる。このような官舎の使い方は、管見の限り、戦前期の官舎に関する既往研究では確認できず、南洋群島独自の使い方であったと推測できる。

7. まとめ

本報では、アメリカ議会図書館アジア部門に所蔵されている『南洋庁東部支庁関係書類』に含まれている一連の図面について、その詳細を報告した。アジア・太平洋資料室所蔵の図面類やハワイ大学ハミルトン図

書館所蔵のマイクロフィルムに含まれる図面類に次いで、旧南洋群島における建築物について、現在確認されている数少ない図面類である。当時の建築活動の全容を明らかにするためには、今後さらに、図面類の収集を進める必要があると考えられる。

謝辞

史料の閲覧にあたっては、アメリカ議会図書館 Thaddeus Yoneji Ohta 氏、ハワイ大学ハミルトン図書館 Karen Peacock 博士、同 Lynette Furuhashi 氏、同 Tokiko Yamamoto Bazzell 氏にご協力いただいた。なお本報の一部は、平成 17 年度住宅総合研究財団研究助成、平成 16～18 年度科学研究費補助金（若手研究（B））、課題番号 16760520）による。記して謝意を表す。

参考文献・引用文献・脚注

- 1) 本研究全体の枠組みは、本稿と同タイトルの「その1」（九州支部研究報告、第40号・2、pp.129-132、2001.3）を参照。
- 2) 矢野、辻原、平川：南洋群島における建築組織について、建築学会九州支部研究報告、第40号・3、pp.633-636、2001.3。
- 3) これらの図面の存在は、琉球大学法文学部 助教授 宮内久光先生にご教示頂いた。記して謝意を表したい。
- 4) アジア・太平洋資料室所蔵の図面とアメリカ合衆国会図書館所蔵の図面以外に、南洋群島における建築物に関するまとまった図面としては、ハワイ大学ハミルトン図書館の Trust Territory of the Pacific Islands Archives に所蔵されている 2000 巻以上のマイクロフィルムの中に含まれている図面がある。これらの図面の状態は非常に悪いものが多く、存在が確認できた図面も現在のところ細部を読み取ることができず、内容の検討については、今後の課題である。なお、マイクロフィルム全体の全容も未だ明らかにできておらず、詳細な検討は今後の課題である。
- 5) 外務省条約局法規課：「外地法制誌」第五部 委任統治領南洋群島 前編、外務省条約局法規課、1962.12。
- 6) 南洋庁長々房：南洋庁施政十年史、南洋庁長々房、1932.7。
- 7) 管見の限り、日本の影響下におかれた地域で、戦前期に RC 造の官舎を建設した事例は、南洋群島のヤップ・コロニアにおける RC 造官舎のみである（辻原、香山、今村、平川：ヤップ島に現存する日本委任統治時代の建築物（1）、建築学会九州支部研究報告、第41号・3、pp.413-416、日本建築学会九州支部、2002.3）。
- 8) 近年の官舎に関する研究動向は、次の文献などに詳しい。崎山俊雄、飯淵康一、永井康雄、安原盛彦、尾川幸奈：明治初期における官舎制度の形成過程に関する研究-近代日本の官舎建築に関する歴史的研究-、日本建築学会計画系論文集、第608号、pp.149-156、日本建築学会、2006.10
- 9) 4) のハワイ大学所蔵の資料にも、南拓の図面は含まれているが、その全容は未だ明らかにできていない。
- 10) 南拓会：南拓誌、南拓会、1982.11。
- 11) トラック諸島春島（現 ウエノ島）で、2001年7月に、日本統治時代の建築物が残存していたことが確認できている。また、幾つかの写真集で、夏島（現 トノアス島）のトラック医院の遺構などが戦後も残存していたことが確認できている。
- 12) 南洋群島教育会：南洋群島教育史、南洋群島教育会、1938.11（旧植民地教育史資料集 I 南洋群島教育史、青史社、1982.1）。
- 13) 角哲、角幸博、石本正明：樺太における王子製紙株式会社社宅街について、日本建築学会計画系論文集、第577号、pp.173-179、日本建築学会、2004.3。
- 14) 野口正章：外地、海洋文化社、1942.12（日本植民地文学精選集 041 南洋群島編 2、川村淡監修、ゆまに書房、2001.9）。
- 15) 中島敦：中公文庫 南洋通信、中央公論社、2001.9。

*1：熊本県立大学環境共生学部 助教授・博士（工学）

*2：アトリエ イマージュ

*3：熊本県立大学環境共生学部 助手・修士（工学）

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.

Atelier Image

Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. Eng.